

第38期第2回神戸市社会教育委員会 会議録要旨

1 日 時 令和7年6月25日（水）13:30～15:00

2 場 所 教育委員会会議室

3 出席者 （1）社会教育委員8名（2名欠席）

（2）事務局

高野尾課長（教育委員会事務局総務課（政策調整担当））

中村課長（文化財課（埋蔵文化財センター担当））、堀内課長（スポーツ企画課（スポーツ政策担当））、佐々木課長（スポーツ企画課（スポーツ振興担当））他

4 議事・報告事項

（1）令和7年度 社会教育関係団体への補助金交付について（資料2-1～3により確認）

（議 長）神戸市PTA協議会と神戸市婦人団体協議会への補助金交付について、教育委員会に意見を申し上げるという議事である。神戸市婦人団体協議会に所属する委員がおられるので、資料と併せて、どんな活動をされているか等共有いただきたい。

（委 員）まず、神戸市との協働事業として、あじさいの講座というものを各区に設けている。できるだけ幅広く、経済的な負担が少ない形で様々な講座を実施している。特に中央区は新しい文化センターができたので、受講者が非常に増えている。収益性を目的に開講していないので、効率は悪いかもしれないが少人数であっても、皆さんができるだけ受けやすいような価格を設定している。

生涯学習という点では、自分たちが生きる上で学習になるという観点での活動も重要と考えており、選挙の啓発や投票率を上げるような運動等にも取り組んでいる。また、毎年一番の活動の柱として、行政とともに市政を考えていく市政懇談会を実施している。自分たちの暮らす社会において何が必要であるか、組織的な学習を進め、色々な場面においてどう物事を判断して、どう考えて行動を起こすかということを日々、社会教育という観点で捉えて活動している。

（議 長）（神戸大学が運営している）のびやかスペースあーちという施設で連合婦人会の方々がこども食堂をやってくださっている。私も一緒に取り組むことがある中で、婦人会の方々が非常に地域に貢献しているなということを実感している。

神戸市PTA協議会であるが、「想いを伝える。」ミニレター&フォト・イラストのコンペティションということで、このような事業を全体でしながら、おそらく単位PTA協議会の支援もされていることと思う。

この2つの団体に補助金を交付するという点について、何か御意見はあるか。

（委 員）最近ではPTAの活動を閉じていっているところも多いが、その辺の状況はいかがか。私の住む地域は児童数が多いということもあり、非常に頑張って活動している。

（議 長）PTAの現状について把握しておきたいところではあるが、どなたかご存知の方はおられるか。

（事務局）PTAについて、現在の存続割合等の資料は今手元がないので分からないが、PTAが

廃止になってきているところは確かにあるものの、やはり学校教育の中で保護者の方の声を聞くというのは非常に大事にしているので、代わりに保護者会であったりと、少し形を変えた組織が出来上がっているところもある。この後議論していただく学校運営協議会にも保護者の方に入っていただき、子供たちを育てる最大の当事者である保護者の声を十分に聞いていこうという動きがある。

(議 長) 承知した。ほかに御意見はあるか。

(委 員) 協議会の在り方というのは、今の求められる使命によって変わってくる。求められるものがどんどん変化する中で、歴史がある団体でも活動が変わっていないとやっぱり人も減ってきている。新しいNPOがどんどん居場所づくりなど、現代の課題を解決しようとして取り組んでいる。協議会としての切り口だけで見ないで、どういう課題解決をしていくかということとトータルで見えていかないといけない。

(議 長) PTA協議会の場合は、保護者の負担というのがずっと問題になっている。特に共働きが当たり前になってくると、いつの時間に会議をするのかなど、そういう現実的なところで、会がもたないという話も聞いており、難しいところである。

それでは、この件に関して、神戸市の社会教育を支えているというところで、議案どおりで補助金を交付するという事で意見をまとめてよろしいか。

(委 員) 異議なし。

(議 長) それでは、社会教育関係団体への補助金交付については異議なしとして、教育委員会への意見とする。

(2) 令和7年度 各社会教育事業に関する事業計画について

①文化スポーツ局文化財課事業計画(資料3-1により説明)

(事務局) 全体の今年度の事業に関しては、資料のイベントカレンダーを御覧いただきたい。

4月から6月まで3か月经ったので、既に実施したものから報告する。春の企画展示として、「こべっこ考古学Q&A」という企画展示を開催した。歴史教育の取組として展示開催するので、通常であれば大体1学期に小学校6年生の児童の皆さんにお越しいただくことが多いが、今回は小学校低学年の児童もターゲットにしているため、少しかわいらしいタッチのチラシを活用しスタートした。最終的に観覧者は6,002名で、そのうち、小・中学校、特別支援学校等団体の見学が21校、1,158名の皆さんにお越しいただいた。前年度、前々年度と比べて、校外学習の件数としては横ばいになっているが、実際コロナ禍以前に比べるとまだ低迷が続いている。その辺りについて先生方に少し伺ったが、行きたいけれども、今回は、万博等もあってバスがなかなか準備できないであるとか、あとはやはり予算が限られているということで断念される学校が多かったと聞いている。

それから、例年行っている連携事業として、6月14日に「五色塚古墳まつり」というイベントを行った。今回は主軸を変えて、資料にあるようなワークショップ等の古代体験を中心としたまつりを実施した。雨天のため、例年であれば1,000人以上の参加があるが、今回は245名のみの参加となった。

現在、夏季企画展として、「神戸の山城を描く」という企画展を開催する予定で、その

準備を進めている。また、夏休みの講座として、「体験！考古学講座」も開講予定で、文化センター等々に出張して考古学講座の準備を進めている。

このまつりを実施した五色塚古墳であるが、現在、史跡指定の館外にガイダンス施設の建設を進めており、同時に追加指定地の公園整備等々を行っている。

現在、そのガイダンス施設の館内展示等の施工について、プロポーザル方式で業者の選定作業をしており、7月中には業者を決定、本年度いっぱいを目途にオープンに向けた施工をしていく。

今後の状況については、また改めて御報告させていただきたい。

(議長) 文化財課の説明について、何か御意見、御質問はあるか。

(委員) 五色塚古墳まつりのチラシに「ボランティアさんと古代体験しよう！」というものがあるが、そのボランティアスタッフの登録状況や活動内容をお聞きしたい。

(事務局) 現在、20名余りに登録いただいている。ボランティアの活動内容としては、この体験講座のお手伝いや春に小学校団体が来られる際の展示の開設対応等である。通常であれば職員がいて、ボランティアの方にはお手伝いという形でしていただくことが多いが、チラシ記載のイベントについては、我々は場所と受付等の提供のみで、あとはボランティアの方に主導で自由にやっていただく内容である。

(委員) 承知した。

②文化スポーツ局博物館学芸課事業計画（所管課欠席のため、資料3-2により確認）

(議長) 何回もこの会議で申し上げていることであるが、神戸大学で文部科学省の受託業務として障害者の生涯学習推進プロジェクトに取り組んでいる。障害のある人たちの生涯学習は、本当に場がなかったり情報がなかったり、様々な点で学校を卒業してから学ぶ機会がないという状況はよく知られていることで、それを少しでも改善していくために、やはり公共施設が学びの場の役割を果たしていかななくてはいけないということをやっている。兵庫県教育委員会との連携で「ミュージアム・インクルージョン・プロジェクト」ということで、県内の15か所の博物館に障害のある人たちの調査隊を送り込んで、少しでも改善できないかということを考えたり、拠点になる博物館と連携しながらその博物館を使った学びの場づくりみたいなことをしているが、神戸市は声かけをさせていただいたものの、結局一つも参画いただけなかった。兵庫県でやっていることなのであまり関心を持たれてないのか、そもそもそういう関心がおありでないのかというのが一つ気がかりなところである。以前、赤ちゃんについての取組は実施しているということで御説明いただいた。実際に資料の「西田真人日本画展」のチラシの裏側には、赤ちゃんと一緒に美術館に行こうという内容が書かれている。前回会議でも確かゆかりの美術館で赤ちゃんに関する取組の報告があったが、赤ちゃんというところでとまっているのかなという印象である。つまり、これまであまり博物館にゆかりがなかった人たちで、学ぶ機会がない、どこか出かけようと思っても行き場がない、行ったところで学んだり知的刺激を受けたりする場がなかなかないという方たちに対して、博物館の機能を十分に発揮していくという方向での議論がどんなふうになされているのか伺いたい。

(事務局) 議長の御意見は所管課に必ず伝え、確認させていただく。

③文化スポーツ局スポーツ企画課 公民館事業計画(資料3-3により確認)

(事務局) 公民館では、春の講座、秋の講座、今まさしくやっているサマースクール、それから通年講座という形で、4つのカテゴリーで講座事業を実施している。通年講座については、環境やICTなど、いわゆる現代的な課題のテーマ、それから健康・スポーツなど、かなり幅広いテーマで実施している。講座の数であるが、通年講座の数が令和6年度に大きく増えているのは、日本語がまだ難しい外国人の方の日本語教室の回数を増やしたことが関係している。

施設の利用者数については、令和6年度は約20万人で、コロナ禍で間に大きく人数は減少したものの、大分盛り返してきている状況である。

現在募集しているサマースクールであるが、資料にある館外の教室は子供たちに非常に人気で、例えば工場見学や日本銀行の仕事を学ぶこと、パンづくりや地下鉄の車庫・基地の探検など、色々なところに協力していただきながら、社会見学的な位置づけで講座を実施する予定である。

また、一般向けの講座では、スマホやSDGsに関する講座等も開催している状況である。公民館は外国人の方も含めて幅広い世代で使っていただきたいため、公民館によっては、特に夏休みの長期期間中に小・中学生が勉強できるように開放したりとか、子供に勉強を教えるようなボランティアを募ったりするなど、いろんな方に利用いただいている。例年アンケートも取っているが、利用者の方からはほぼ満足という回答が90%を超えており、そういった形である程度満足していただけていると考えている。ただ、社会の変化も著しいため、それに合わせたテーマも含めて、今後とも幅広い方に使っていただけるようにという視点で事業を進めていきたい。

(議長) 公民館事業の説明について、御意見、御質問はあるか。

(委員) 外国人の方の日本語学習の講座は、例えばどこで実施されているか。

(事務局) 南須磨、玉津、長田の3か所で実施している。

(委員) 神戸市は各区によって、外国人の方の比率が随分違ってくる。例えば中央区であれば、10%ぐらいの比率である。小学校では国語の授業のときに外国から来た子は国際学級に移動して、そこで日本語の勉強をする。しかし、あとの授業は全て日本人の子供たちと一緒にであるため、全然授業についていけず、その点を補完するものが何もない現状がある。最近では、就労のために日本に来られる方が多く、親御さんと一緒に日本に来る子供もいて、いずれにしても日本のこの先の担い手ということにもつながっていくと思うので、自国の国民と同じようにきちんとした教育をつけていく必要があると考える。このあたりは需要が非常に大きいと思うので、ぜひ公民館でも日本語学習で困っている子供の支援にかかる手だてを考えていただきたい。

(事務局) 日本語を話せる子と話せない子のレベル差が非常に大きい。お子さんに限らず、親御さんも全然話せない人もいたり、まあまあ話せる方もいたりで、いわゆる教室型でやるにはなかなか難しい。どこのレベルに合わせるのかということも踏まえながら、できるだけ細かく対応できればというように思っている。

- (委員) 公民館で開催されている日本語教室と聞いたときに、大人を対象にしていると思ったが、今の話では子供が対象ということか。
- (事務局) 基本的には対象は定めていないが、時間的に結構昼間に実施しているケースが多いため、大人（親御さん）が中心にはなっている。
- (委員) 親側の支援も必要かと思って伺ったが、先ほどのお話にあったように子供たちも困っている。昼間だと当然学校に行っていて難しいが、何らかの形で支援してあげてほしいというのが一つである。もう一つは、日本語教室で今通っている人たちの第一言語が何なのかが気になっている。その困っている人たちの第一言語を理解できる人でないと講師もできないような気がするので、どの国の言葉を理解できる日本語講師が欲しいのか、また、足りない国の言葉についてはどこかで募集するということも必要かと思うので、そのあたりの実態把握ができていたら教えていただきたい。
- (事務局) 細かいところまで実態把握はできてないが、先ほど話にあった中央区と長田区が一緒かといったらおそらく違うので、区によって実態は異なると思う。もちろん公民館もそうであるが、そのあたりは神戸市全体で考えていく必要がある。長田区であればK I C Cなど、全体的な支援するところもあるので、そういうところと連携しながら、それぞれが役割を講じていくのが一番いいのではと考える。
- (委員) 青少年会館の登録団体の中で、週2で日本語を教えているボランティア団体が1つある。また、今年の4月から大学生で勉強を教えるボランティア団体が1つ増え、青少年会館で活動されているので、またつながりや連携といった部分でも御紹介できればと思う。
- (委員) 過去に海外赴任の経験があってもう仕事を退職された方で、一度、学校の外国籍の子供たちのサポートをする支援員のようなものに登録されたらどうかという話をしたことがあるが、学校に入って子供に接するからか、なかなかハードルが高いようであった。そういう意味で、公民館での日本語教室ということであれば、自分も海外に行くときに助けてもらったのでその恩返しであったり、自分が話せるということでやりたいなという方は意外といらっしゃると思う。この後の議題にあるコミュニティ・スクールも絡めて、何か良いアプローチがあるのではと考える。ちなみに、公民館での日本語教室の先生はどんな方がされているのか。
- (事務局) 詳しいところまで把握していないが、おそらく海外赴任をされていたという方ではなく、本当に地域の方にボランティアという形が中心。

④文化スポーツ局スポーツ企画課 コミスタ神戸事業計画（資料3-4により説明）

- (事務局) 神戸生涯学習支援センター（通称コミスタ）は、旧吾妻小学校を改修して、平成12年9月から社会教育施設として活動を展開している。市民の学びを支援するということで、「生涯学び続けたくなるまち・神戸」の実現を目指し、①全市的な生涯学習活動の拠点、②自立した市民による参加型の施設、③出会いを通じて生きがいを見いだす学びの場、としての役割を担って活動している。具体的には、体験教室や講演会の毎月開催、生涯学習フェスティバル等を通じて、子供から高齢者まで幅広い世代への積極的な支援、また、自主的に活動する生涯学習グループなどの育成の支援に取り組ん

でいるところである。令和6年度の延べ利用者数は241,119人、利用率は57%となっている。

主な講座等の実施状況であるが、市民講師制度の運営ということで、市民の方に講師として登録をいただき、市民講座を開催するという取組をしている。令和6年度は380名の方が市民講師登録をされている。また、市民講師による一日体験教室・講座は、令和6年度は109回、参加者数1,932人ということになっており、資料にあるとおり様々なテーマで教室・講座を開催している。コミスタ以外での取組としては、一日体験教室も行っている。また、「市政リレー講座」として、様々な現代的課題のテーマを取り上げた市の職員による「出前トーク」をシリーズで毎月開催し、市政を分かりやすく伝えるということも実施している。

さらには、神戸市老眼大学という取組も積極的にやっているほか、大学と連携した様々な講義の開講など、生涯学習のための支援を進めている。

(議長) コミスタこうべの事業説明について、御質問、御意見はあるか。

(委員) 特になし。

(議長) 公民館の場合は、公民館に講座の企画運営をしたりする専門の職員がいるということをお前回説明いただいたと思うが、コミスタ神戸にはそういう専門の方はおられるのか。

(事務局) コミスタ神戸は指定管理でスポーツ協会に委託をしているので、基本的にはスポーツ協会の職員がこれまでの実績であったり、アンケート調査を行って周囲の方のニーズを踏まえて、企画運営等を行っている。

(議長) 社会教育主事の資格を持っておられる方とかではないということか。

(事務局) (社会教育主事を持っているかは分からないが) 教員の方が多く採用されておられるので、センター長を筆頭に教員の方が行っている。

(議長) 老眼大学とシルバーカレッジでは、学べる場としての密度が随分違うとは思いますが、同じ高齢者に対する学びとして、どのように差別化しているのか。

(事務局) 基本的に老眼大学の実施回数は毎月2回程度で、回数的には比較的多くない。一方、シルバーカレッジはもっと綿密に講座として組まれているので、気軽に参加でき、文化ホール等で講演を聞きながら、仲間づくりをしながら、というのが老眼大学の特徴かと思う。シルバーカレッジは、もう少しテーマに沿って実践も踏まえたプログラムになっている。

⑤文化スポーツ局中央図書館事業計画（所管課欠席のため、資料3-5により確認）

(議長) 御質問、御意見等はあるか。

(委員) 前回会議でも確認したような記憶があるが、子供の読書活動の推進計画を策定する予定があるのか気になっている。今回の資料ではそのあたりが分かりかねるため、ご担当の方に確認いただきたい。

(事務局) 所管課に伝え、確認させていただく。

(3) 令和7年度指定都市社会教育主管課長会議及び社会教育委員連絡協議会 神戸市開催について

(資料4-1、2により説明)

(事務局) 令和7年度の指定都市社会教育主管課長会議及び社会教育委員連絡協議会が、神戸市主催として11月12日に開催予定(WEB開催)である。会議開催に当たり、事前に各都市から協議題を集約しており、本日は神戸市の協議題について、委員の皆さまから御意見等いただき、決定させていただきたい。

前回の社会教育委員会会議において、コミュニティ・スクールの内容を中心に御協議いただいた。前回の協議内容を踏まえ、資料のとおり、協議題を提案させていただいている。前回会議で、学校と連携しているのがいつも同じメンバーであるということ、コミュニティ・スクールでは新たな人員の引き込みであったり、新たな切り口が必要という御意見をいただいた。また、学校の先生は異動があるので、実際に地域の核になっている方が学校現場といろんなところをつなぐ役割を担うのが大事ではないかという御意見をいただいた。協議題の提案理由には、学校運営協議会の取組において、地域人材であったり、社会教育施設等との地域資源を生かして、学校教育に結びつけていくことというのが非常に重要だと考えていること、そのことがひいては地域の活性化であったり、地域人材の育成につながるということが期待されることを記載している。また、子供たちにとっても、学校教育以外で学ぶということが増えるというのは非常にいい経験になると考え、その旨を記載している。これらを踏まえて他都市の取組状況を伺いたく、今回の議題を提案させていただいた。

(議長) それでは、この件について少し協議したいと思うが、事務局から提案のあった協議題について、御意見等はあるか。

(委員) 私の地域では、小学校をお借りして運動場にテントを建てて地域の人と一緒にカレーを作ったりして、1泊のキャンプを行っていた。コロナ禍で一度中止になったが、現在は15時ぐらいから夜21時まで小学校をお借りしてキャンプは継続している。その時には、船長さんに話をさせていただいたり、地域で障害のある方と交流を持ち、どうしたら私たちが助けたりできるのかというのを子供たちにも経験してもらいたいということで、地域の小規模の事業者とも連携を取りながら、ずっとやってきた。やはり学校を拠点にして、地域のいろんな人がつながっていくことを実感している。

(議長) 今お話しいただいたことは、やはり取組を進めていることによって、これまでつながりのなかった方たちともつながって、それが地域全体のパワーアップにつながっているということだと思う。どういう条件でそういうことが生まれるのか、ということが問いになる。

(委員) 先の話では、もともとはPTAの役員だったメンバーのつながりがきっかけであった。祭りなどが無い地域だったので、子供たちに何かそういうものを学校中心にできたらなということでいろいろ意見を出し合って取組がスタートした。そこに防災コミュニティや青少協などにも参画いただき、みんなで協力して進めることができた。

(議長) こんなことやろう、あんなことやろうと提案してくれる人がいるというのが大きいと思う。

(委員) 学校のグラウンドに我々がテントを持って行って、テントを建ててそこで宿泊する、グ

ラウンドの真ん中に鉄板を引いてキャンプファイヤーをするということをやらせていただいた時期があった。子供たちにとって、自分たちが通っている学校に泊まれるという体験は、多分一生思い出に残るだろうということで長年やってきたが、やはり地域の皆さんの年齢が上がっていくにつれ、体力的に少ししんどいという声もあり、諦めることになった。でも、それは非常に意味のある取組だったなということと、これから先、地域によっては地域コミュニティや学校運営協議会を中心に、同様のことを実施できると思う。地域と専門性を持っているプロ集団と連携しながら、融合しながら、そういった取組を地域の子供たちのために行うということは、社会教育という観点でも重要なことで、そこに学校教育がつながっていくことは非常に意味のあることだと考える。

(委員) 協議題で「新たな連携」という言葉が強調されているが、これまで委員のお話いただいたものは、過去に取り組みまれてきた中での素敵な事例である。「新たな」というところを強調してしまうと、そういう過去にやってきた事例をお話しいただけない可能性があるのでは、少し気をつけたほうがいい。

(事務局) 「新たな」という表現は訂正させていただく。

(委員) 私の子供が小学校に通っていた頃の話であるが、多国籍の子供たちが随分多く、「ふれあいフェスティバル」という国際フェスティバルのようなイベントを実施していた。保護者の中にいろんな国の人がいるので、いろんな国を勉強するということで、その外国に暮らしたことがある方や外国のお母さんなどにゲストとして来ていただいた。1年に1回やっており、保護者もみんな駆り出されて、一緒にお手伝いしたり、その国の勉強をしたり、婦人会はそこで日本の民謡を教えるクラスを1つ担当するなど、非常に盛んにやっていた。しかしながら、だんだん働き方改革で、いつの間にかその活動もなくなり、各学年で保護者が主体で行っていた学年活動もなくなってしまった。今、PTAももう存在しなくなっていることを考えると、コミュニティ・スクールの元をつくる要素というのがどんどん縮小していつている気がする。これからコミュニティ・スクールというものを考えるときに、今までやってくれていた人たちの余力を頼るのではなく、やはり次の担い手を作っていくのが難しい。PTAがなくなるといことは大きい力を削ぐことでもあると思うので、学校の中でそういう保護者を巻き込みながらの活動も重点的に考えてほしい。

(委員) 前任の学校で、マルシェをするのにあたり、子供たちに生活科や総合学習で学習したことを発表してもらえないかという提案を受けたことがあった。しかし土日となると、働き方改革の関係で、教員がそこに引率するというのは難しい。保護者や地域の方、それこそ学校運営協議会の中でそういった組織を作って、引率していただくというようなことはどうだろうかという提案させていただいたことがある。そういったところも含めて、やはり先ほどおっしゃられたとおり、働き方改革の影響は結構大きい。各コミュニティ・スクールにおいて、働き方改革もある中で、どうやって運営し、新しい連携や取組を進めているのか、私としては聞いてみたい。

(委員) やはりどこか「取っかかり」というのが必要かもしれない。先ほどの話にあったように、教員以外の人材をどう活用するかというところは、多分どこも頭を悩ませていると思

う。そういうリソースがあるところ、地域としてずっとつながっているところは、まだまだその地域ブランディングができていて、そこにコアな人がいるから継続ができる。そうじゃないところがやはり苦しい。コミュニティ・スクールという新しい枠組みはできたが、その枠組みをどう捉えていくか。これまでの既存のものと、委員がほとんど変わらないという課題もある。

(事務局) 神戸市内でもいろんな事例が各学校でできてきている。他都市の好事例も今回学ばせていただいて、それを学校に共有することによって、自分たちの地域、ここの学校、ここの子供たち、保護者ではこういうことだったらできるかな、という参考にしていただけたらと思う。

(議長) 今委員の話にあった、「どんな取っかかりを」という点が、一つのポイントになるかもしれない。

(委員) 私の地域では夏祭りをする際に、校区の小学校、中学校、幼稚園で絵画の募集をかけて絵画展を開いている。今、学校が授業で絵にかけられる時間が少なくなっている中で、そういうことも踏まえて、一つの行事をきっかけにいろんな組織を巻き込み、今年はさらに3つの保育園も加わって実施する予定である。学校の枠だけに捉われているとなかなかできないので、そういう地域で新しく何か学校を寄せながらやるということも一つあるかなと思う。

(委員) 今、子供たちの現状として、認定こども園もそうであるが、あまり居住区域に紐づいていないということがある。保育施設の割り振りが、おそらく昔は歩いて行ける範囲の幼稚園や保育所に行っていたと思うが、今は送迎バスなどがあり、あまり地域に紐づいてない。保護者の接点も、幼稚園では自然と送迎で出会ったりということがあったと思うが、保育所ではほとんど接点がないということも聞いている。その状態のまま、小学校、中学校に上がり、親は仕事が忙しいというところで、軸が地域に上手くはまる人が少ない。そういう現状に対して、最終的に何をしたらいいのか、また、コミュニティ・スクールの目指すところが見えておらず、悩ましい。

(事務局) 時代の流れが激しい中で、学校教育の中だけでは子供たちにつけさせたい力がなかなかつけることができない。今の社会、今の地域課題が何で、それを解決していくにはどのような方法があるのかということ子供たちに考えてもらうことが重要である。そのために、地域住民、大学、NPO、企業の方など、いろんな知見を持つ方と一緒にあって、子供たちの学びと成長を支えていく仕組みが必要で、それがコミュニティ・スクールということになる。

(議長) 本日、たくさんの意見をいただいた。以上を意見としてまとめ、教育委員会への意見とする。